

---

# 道化は嗤い、世界は踊る

蓮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道化は嗤い、世界は踊る

### 【Zコード】

Z5997X

### 【作者名】

蓮

### 【あらすじ】

事実は小説よりも奇なり

いきなり異世界に放り出された少女。勇者として召喚されたわけでもなく、魔王に選ばれたわけでもない。

特別な力なんて与えられるはずもなく、気が付いたらそこは荒野。平和な世界で暮らしていた何の力も持たない少女が、過酷な世界で生き残るために失くしたモノ。足搔いた先にあるものは……。

彼女は異世界で何を見て、何を知り、何を選ぶのか？

## 設定資料・登場人物（前書き）

これは「道化は嗤い、世界は踊る」の設定資料と登場人物の詳細を載せたものです。お話が進むごとにこちらの情報も増やしていきます。

\*ネタばれ注意です！！

## 設定資料・登場人物

### 世界観

地球：瑠璃たちの生まれ故郷

### 登場人物

#### 主人公

・如月瑠璃  
(きさらぎるり)

種族：人間

性別：女

誕生日：10月20日

年齢：13歳

身長・体重：145cm・36kg

容姿：

ボブカットの黒髪  
黒目

性格：

基本的意に明るい性格。静かな場所が好きでお気に入りは図書館。不真面目ではないが気まぐれな面があり猫みたいだと言わる。そのため運動や勉強の成績にはかなりばらつきがある。だが料理だけはいつもまじめにする。一人称は「ボク」。

## 第一章

・如月一哉

種族：人間

性別：男

誕生日：8月19日

年齢：13歳

身長・体重：162cm・50kg

容姿：

短めの黒髪

黒眼

性格：

正義感が強くリーダーシップがあるため孤児院の中では兄的存在。体を動かすことが好きで、サッカー部に所属している。勉強もそれなりできる。

趣味：サッカー、食べること、外での遊び全般

・如月明日香

種族：人間

性別：女

誕生日：5月14日

年齢：14歳

身長・体重：159cm・49kg

容姿：

肩までのパーカーがかかつた黒髪  
黒眼

性格：

孤児院一番のしつかりもの。頭がよく、成績は常に上位。  
生徒会に所属している。

きついことをいつつもあるが根はとても優しい。

趣味：音楽鑑賞、ウォーキング

## 設定資料・登場人物（後書き）

矛盾点や質問がありましたら是非お教えください。矛盾点は改善して、質問はできる限りフィードバックしたいと思います。それでは本編の方もよろしくお願いします。

## 序章　開幕の鉛（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

私たちはたくさんの奇跡と偶然によつて生きている。

世界には「もしあのとき～～だつたら」というたぐさんの「*if*」の可能性がある。

それは常に死と生の狭間に<sup>はざま</sup>いるといふことでないだらうか？

そう考えると私たちの身にいつ何が起きてもたいして不思議ではないのかもしれない。

真上に上がつた夏の太陽がアスファルトに容赦なく照りつけ、動かなくとも外にいるだけでじんわりと汗をかく七月の暑。

そんな厚さのなかを三人の制服を着た学生が住宅街を歩いていた。

「あーあぢい。あつこあつこあつこあつこあつ

」

「あーもう、ひるをいわね！何回も同じことを言わないでよ。よ  
けいに暑くなるじゃないのー！」

少年がうだるような暑さにぼやいていると、並んで歩いていた少  
女がイライラしたように言ひ放つた。

少年の肌は小麦色に日焼けしており、精悍な顔立ちに短髪の髪が  
いかにもスポーツマンらしさをかもし出してい。

少女のほつは緩やかなバーマがかった髪を肩まで伸ばしており、  
肌は透き通るように白い。

十人に聞けば十人が綺麗だと言つだらう。

そんな容姿のため人が近づきにくいオーラを発しているので、  
友達を作るのにとっても苦労するが明日香の悩みだ。そして今は不機  
嫌なせいでのオーラがさらに増しており、ある意味で神々しく見  
えるのかもしれない。

だが幼馴染である少年には関係のないことであり、それはもう一  
人の幼馴染にも同じように言えることだつた。

「まあまあ、明日香ちゃん落ち着いて。一哉君が暑いって言いた  
くなるのもしょうがないよ。今日は今年なつてから一番の猛暑らし  
いから

そのもう一人の幼馴染の声が、この夏の暑い日に熱い口論を始め  
よじとした二人を止めた。

明日香と一哉に挟まれたポジションにいた少女は、他の二人に比べるとかなり小柄で中学校の制服を着ていなかつたら小学生と間違えられるだろう。綺麗な黒髪はボブカットをしている。

ただでさえ童顔なのに髪型が余計に幼さに拍車をかけているのは本人以外には周知のことだ。明日香とは違い小動物のようなかわいらしさがあり、男子のみならず女子にも人気がある。そしてこれも本人以外には周知のことだ。

「まあ確かにね、これだけ暑いとね。こんな暑いのに熱気で満ちた体育館の中で校長のつまらない話を三十分も聞かされたときは本当に倒れるかと思つたわよ」

「まつたくだ。でも明日からようやく夏休みだぜ。海にプールに祭りに花火、キャンプもいいし釣りや肝試しなんかもいいよな。この夏はやりたいことがありすぎて困るぜ！！」

「浮かれるのはいいけど私たちは年長者なんだからね。小さい子供たちの面倒を見なきゃならないのよ。そこんとこりわかっているんでしきうね」

一哉の瞳はこれから始まる夏休みへの希望でキラキラと輝いていた。

明日香は若干あきれながら自分たちの立場を完全に忘れている一哉へ容赦のない一撃を『えた。

「う…………も、もうひとわかつていろともー。」

「…………」

明日香はジト目で一哉を見つめる。

「なんだよその目はー? 本当に最初からわかつていたからな。ちよつと夏休みにしたいこと言つただけじゃないか。本当に明日香はガニガニつるさーな。瑠璃みたいに少しほんのうだ?」

「なんですかーーー。」

「ふ、一人とも落ち着いてーーー。」

それが気に食わなかつたのか一哉が明日香を挑発し、明日香は一哉に掴みかかる。

今まで一人のやりとりを見ていただけの瑠璃もさすがにまづいと思つ、止めるために一人の間に割つて入る。

これが三人のいつものやりとりで日常だった。

近所の中学校に通う一年生。小学校も同じで名字も同じ「如月」。これは、たまたま苗字が一緒だったわけでも、三人が三つ子だったわけでもない。

ただ三人とも「如月園」という孤児院に住んでおり、そこに住んでいる子供には如月という名字が与えられるというだけである。

瑠璃は本当の親というものは知らない。小さいときには色々とあつたが、物心ものいのちが付く前から住んでいる如月園が自分の家で、いつも優しい園長のことを親だと思っていた。そして自分と同じ年だが自分よりしっかりしている一人を本当の兄と姉、いわば家族のようになつて大切に思つていた。

(いつまでもいつして一人と過ぐす日々が続きますように)

単純だが心からの瑠璃の願い。

何事もなければ叶はずだつた願い、続くはずだつた日常は三人の足元に現れた不思議な模様によつて思わぬ形で終わりを迎えることになる。

開幕のベルは鳴った。

舞台の幕が上がるまであと少し。

舞台の準備はもうできた?

## 序章　開幕の鈴（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

誤字や脱字のご指摘はしていただき、だければありがたいです。

小説に関する感想やご意見は貰いたいのですがなるべく柔らかく言つていただけると嬉しいです。

それではこれからもご愛読よろしくお願いします。

## 第一話 開幕（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

人生の中には必ず転機が存在している。

それは転職であったり、結婚であったりと人によつて様々だ。

そう、転機とは必ずしも平穏なものばかりではない。

「……」

今まで見ていた風景が一瞬で変わつてしまつたとき、はたして何人の人間がまともな思考を保つていられるだろうか。少なくとも大半の人間は頭が真つ白になつてしまつははずだ。ここに立つてゐる人間もその大半に含まれる一人だった。

瑠璃は田に飛び込んできた光景に瞬きすら忘れてその場に固まってしまった。

しばらく茫然としていた瑠璃はとにかく現状を確認するために頭を切り替えることにした。

目をゆっくりと閉じて深く深呼吸すると、もう一度ゆっくりと田を開けて周囲の状況を確認した。

先程まで自分がいたはずの見なれた町並みはそこにはなく、広大な自然が広がっていた。

吹き抜ける風、乾いた大地、まばらに生えている草木。

今にでもライオンやキリンが出てきそうな見事な荒野だった。

（ぼくはたしか…学校が終わつていつもの道を三人で歩いていたはずだけど……。そうだ！ 急に地面になにか模様のようなものが現れて、それから……）

そこで瑠璃はあることに気が付いた。

(「人がいない…」)

つこちつさまで一緒にいたはずの一人の姿がどこにも見当たらないのだ。

(「にはボク一人しかいない」)

そう直覺した途端に瑠璃は錯乱状態さくらんおちいに陥つた。

いつたい「にはボク」なのか？

なぜこんなところにいるのか？

一人はどこにいつたのか？

浮かんでは消えていく疑問。

次々と押し寄せてくる不安と困惑。

これが三人でいればまだ平氣であつただろつが、人間は群れていなければ基本的にとても弱い生き物なのである。それは肉体と精神のどちらにも言える。特に瑠璃は過去の経験から精神的な面が脆かつた。明日香と一哉はその理由を知つており、二人でフォローをしてくれていた。だが、今その二人はいない。

抑えきれないほどの感情が波になつて次々と押し寄せて心を惑わせる。そして溢れた感情の代わりのよつて瑠璃の田からは涙が次から次へと零れていつた。

(…束…らね)

懐かしい夢を見た気がした。

それはとても暖かくて優しいまだ幼き日の夢。

「明日香ちゃん？」

聞きなれた声が聞こえた気がして瑠璃は顔を上げた。

どうやら久々に泣いたせいであのまま疲れて寝てしまっていたらしい。

(夢の中今まで出てきて助けられたなんて)

瑠璃は先程まで見ていた夢を思い出してクスッと笑った。  
その表情には未だに影が残るもののが先程に比べれば生氣に満ちていた。

「……大丈夫、ボクは……強いから」

そう小さくつぶやくと、瑠璃は今にも崩れてしまいそうな膝に鞭を打つて立ち上がった。手の甲で涙を拭い、気持ちを引き締める。

「……」がどこかはわからない。

どうすればいいのか、なにをするべきなのかもわからない。

（でも、……）

瑠璃は願つ

（……約束……したから）

離れてしまった二人が

(……だから)

じつか無事でありますよ」と

(「人を見つけよう。」)

やつして瑠璃は最初の一歩を踏み出した。

これが始まり。

幕が上がり、観客の盛大な拍手が鳴り響く。  
さて、この劇（お話）は喜劇となるのか？悲劇となるのか？

役者はまだ揃わない



## 第一話 開幕（後書き）

「」 覧いただきありがとうございました。  
誤字脱字の指摘や、感想などございましたらお申し付けください。

## 第一話 逃走（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

## 第一話 逃走

この世でもっとも強い生物はなにか？

この問いには様々な答えがあるだろう。純粹な力か、あらゆる物を作りだす技術か、はたまた劣悪な環境に耐えられる生命力か、挙げていけば切りがない。

だが単純に「生きる」という点で見た場合、人間ほど脆弱な生物はない。

「生きる」ということは生物としての本能の内の一つだ。そして本能を抑える理性を持つからこそ人間は人間であり、故に人間は脆く儂いのだろう。

あたり一面の荒野。すでに日は沈んでおり街灯などの明かりもない。空に浮かぶ月の光が荒野を照らし出している。

人の姿など見かけるはずもないこの場所に必死になつて走る少女の姿があつた。

「はあ、はあ、はあ……げほつ……はあ、はあ……」

すでに息も絶え絶えだが、少女は走るのをやめなかつた。いや、やめるわけにはいかなかつた。もし、立ち止まるようなことがあれば、それは少女の最後を意味する。すぐに後ろを追つてくるモノに追いつかれ、たいした力もない少女ではあつといふ間に彼らの晩御飯になつてしまつだらう。

(それだけは遠慮したいな)

そう願わざにはいられなかつた。

それは今日の夕方まで遡る。さかのぼる。

荒野に来てから一ヶ月。

いまだに荒野を歩き続けている瑠璃の体力は限界だった。食べるものなどあるはずもなく、水も飲んでいなかつた。

荒野を歩き始めてすぐに考えたのは食料と水のことだった。

【人間は水があれば一ヶ月は生きていける】

学校の図書館で見た本が正しければ最優先事項は水の確保である。

そして肝心の水をどのように入手するかだが、瑠璃には考えがあつた。

少し歩いてみただけだが、どうやらここは鬼や鹿などといった動物が住んでいるようでその姿を先程からちらほらと見かけていた。ということはこうした動物たちが水を飲むための場所がどこにあるということだ。つまり動物が多く集まっている場所に水場があるのではないかということ推測だ。

そして瑠璃のこの推測は合っていた。

幸運にも鹿の群れを見つけてその後を追つていった先に水場を発見することができた。

(水だ！！)

瑠璃は水が飲めると喜び、駆け足で水場に向かった。だが、水場まであと少しとこころで違和感に気付いた。目の錯覚でなければ水面がなんとなく盛り上がっているような気がするのだ。

その光景に瑠璃の足は止まってしまった。

結果としてはその判断は正しかったと言える。なぜなら、瑠璃が歩

みを止めた瞬間、水面が波打ち巨大なクラゲが姿を現したからだ。

巨大クラゲは全身が透明で体中から細い触手が伸びていた。いや、正確には巨大クラゲというよりも触手が生えた巨大スライムといったほうがシッククリくるだろう。

突如現れた巨大クラゲ改め巨大スライムに動物たちは脱兎のごとく逃げ出した。しかし巨大スライムは逃げ遅れて未だに水辺にいた兎や鹿を触手で掴むとそのまま水の中に引きずり込んで姿を消した。

残つたのは波紋が広がる水場と静寂、少し離れた位置からことの成行きを見守つていた瑠璃だけだ。

「…………え？…………いやいやいやいやいや

その異常な光景に呆気にとられていた瑠璃は思わず顔の前で手を振りながら否定を繰り返した。

「いや、今のはないよね。なにあのJMAは？！クラゲ？いや、アメーバ？……まあどうひこしろ水を飲めるような状況じゃないよね……」

そうして水を飲むことをあきらめてから今日まで一度も水場を見つけていない。太陽の熱が瑠璃の身体から水分と体力を容赦なく奪つていき足取りも覚束おぼつかなくなつてきていた。

脱水症状で倒れるかもしれない、そんなことを考え始めたとき。視界の先にキラキラと光るもののが見えた。一瞬なにが光っているのか分からなかつたが、それが光を反射している水面だと分り、瑠璃ははやる気持ちを抑えて慎重に近づいた。

瑠璃は水場に近づくと水を飲んでいる動物たちをしばらく観察していたが襲われる様子はない。どうやらこの水場に例の巨大スライムはいないうしいと判断し、一匂うるおふりに喉を潤すことができた。

水といつても泥水に近かつたが一田間なにも飲んでいなかつた瑠璃はそんなことを気にすることもなく無我夢中で水を飲んでいた。

故にいつのまにか水辺から動物たちがいなくなつてゐることに気づくことができなかつた。

水を飲んで十分に喉の渴きを癒した瑠璃は違和感に首を傾げた。先程までいたはずの動物たちは姿を消し、不気味な雰囲気がその場を包んでいた。

瑠璃の額には冷や汗が浮かび、心臓の音が嫌に大きく聞こえる。

(なんか……寒気がする)

夕方になつて多少は涼しくなつたとはいへ気温は高く、寒さなど感じるはずもない。なにが起こっているのかは分からぬが早くこの場所を離れたほうがいいと頭の中で煩いくらいに警報がなつてい

る。自分の勘に従い瑠璃は急いでこの場から離れようとな立ち上がった。

しかし、それは遅すぎた。

瑠璃が立ち上ると同時に、木の陰や茂みの中から次々と狼が現

れた。

たとえ頭に角が生え、目が三つあっても狼と呼ぶのであればの話だが。

瑠璃は一回眼を閉じると、自分自身に落ち着けと言い聞かせてからもう一度狼（？）を見た。

（……変わらない）

見直して確かに角と三つの目があることを確かめた。瑠璃は一先ず考えることを後にして、改めて自分の周りを見渡した。ざつと見たところ五、六匹ほどの狼の群れが自分を取り囲んでいるのようだ。

(“うつむかへ、うつすねばいい、うつしたら　　）

最初こそ現れた狼の姿いきを取られもしたが、これがかなり危険な状況であることは重々（じゅうじゅう）承知している。

運動が苦手というわけでもないが、狼に足の速さで勝てるとは微塵も思えない。それ以前に、この包囲網から脱出する手立てがない。手元に武器になりそうなものもなく、学校の鞄も荒野にいたときにすでに持つていなかつた。そのため今着ている制服以外には何も身に付けてはいけない。

万事休す

瑠璃は自らの死を悟つてあきらめに近い感情が瑠璃の心を満たそ  
うとした。

まさにその瞬間であつた。

不意に茂みの揺れる音がして狼たちの注意が瑠璃から逸れたのだ。  
音の正体は逃げ遅れていた兎が動くときに茂みを揺らしたことによ

るものだつたが、注意が逸れた隙に全力で走りだしていた瑠璃には  
知る由もなかつた。

「はあ、はあ、はあ……げほつ…はあ、はあ…」

(速く、もつと速く!—)

あのとき、なんとか包囲網から抜け出せたのは良かつたが、狼たちがそのまま見過ごしてくるのはずもなく、瑠璃は後ろから迫る気配に必死に走り続けていた。

どれだけの時間が経つたのだろう。

夕日で赤く染まっていた荒野はすでに闇に閉ざされ、足元を照らすのは僅かな月明かりのみ。

脚は震え、肺が痛み、心臓は悲鳴をあげる。

ただ、ひたすらに逃げることだけを考えていた。それでも瑠璃には分かったことがあった。  
だが、導き出した答えは瑠璃に苦痛を与えるだけであった。

一つ目は、今まで逃げ延びてはいるが、狼たちはその気になればいつでも自分のことなど狩れたであろうということだ。  
狼たちは狩りを楽しんでいるだけに過ぎない。獲物が必死になつて逃げるのを追いかけ、じわじわと弱らせていくのだ。

決して自分は生きているのではない、生かされているのだ。

そして二つ目は、ここが自分が住んでいた世界ではないということ

と。

いや、このことはとっくに分かっていた。しかし、認めたくなかっただけなのだ。見えていたはずなのに無意識に眼をそらしていた。

夜の闇の中で荒野を照らす一つの月が浮かんでいたこと。

水場に集まっていた兔や鹿が姿に似ているが違う生き物だとうこと。

何十メートルもの巨大な鳥が空を飛んでいたこと。

気付いていて、気付かないふりをしていた。

絶望していまいそうだったから。

狂つてしまいそうだったから。

いつかは帰ることができると、いつ希望を失くしてしまってさうだったから。

だから、見えないふりをしていた。

（前に読んだ本の中に似たような話があつたつけ）

たくさん読んだ本の中には、た異世界に召喚される人の話。

異世界で出会った騎士に守られる、少女の話。

たくさんの人々に愛されて幸せになる、少年の話。

不思議な力を手に入れて大切な仲間たちと一緒に戦う、勇者の話。

幸せそうな人々のを描いた挿絵。明るく希望に満ち溢れた素敵なお話。

（だけど……ボクには……）

最後の三つ目。

自分を守ってくれる騎士  
愛してくれるたくさんの人  
一緒に戦ってくれる大切な仲間たち

(そんなモノはイナイ)

現実でそんなおとぎ話のようなことは起こらない。  
危機<sup>ピンチ</sup>に駆けつけてくれる英雄<sup>ヒーロー</sup>なんて存在しない。

(頼れるのは自分だけで、信じられるのも自分だけ。だけど、明日香ちゃんや一哉君だってきっと大変なおもいをしながら必死に生きているはず。だから、ボクもどんなに醜くても、どんなに滑稽でも、最後まで生きることをあきらめない。)

これが、瑠璃が異世界に来たという現実と向き合い、初めてこの世界で生きていく覚悟を決めた瞬間だった。

（そのためにはなんとか狼から逃げる術をかんがえなくちゃ。でも…一体どうしたらっ！？）

そうして決意も新たに自らの生き残る道を探してした瑠璃に次に襲ってきたのは、足元の喪失感だった。

「…ひー！」

瑠璃はあまりの驚きに悲鳴を上げる」とも言はずに急に足元できた穴に落ちて行った。

舞台の上には一人の少女。

ボロボロの服を着た浮浪兒<sup>ふろうじ</sup>は日々食べ物に飢え、奴隸商人から逃げ回る。

クルクルクルクル

逃げろや、逃げる。恐い大人（狼）が追ってくる。

そこに救いの手を差し伸べる者はいない

## 第一話 逃走（後書き）

こんな駄文でも読んでくださる方がいることに感激している蓮です。

あまりの嬉しさに予定より早く更新しています。この後が大変になりますが頑張ります。

## 第三話 遭遇（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

## 第三話 遭遇

小さい頃は目に見えるもの全てが新鮮で、毎日が未知との遭遇だった。

そうしてたくさんのことを探り、学び、育ってきた。

しかし、大人には臆病になってしまいかもしれない。  
毎日同じことの繰り返す退屈な生活に刺激を求めるもの、実際に  
身の回りでなにか起こればまず第一に考えるのは自己保身のはずだ。  
それは、心のどこかでは常に平穏な生活を望んでいたからだろう。

これは臆病になつたというのだろうか、それとも大人になつたと  
いうのだろうか

「うべつ……」

下へと落ちていく恐怖に咄嗟に目を閉じていた瑠璃は、以外にも早く終わりをむかえた落下にうめき声を漏らした。

地面に打ち付けたお尻を撫でながら落ちてきた場所を見上げた。十メートルほど上にある一メートル四方の四角い穴から外の月明かりが零れている。じつやうあそこから落ちてきたらしい。

現在瑠璃がいる場所は小さな部屋になつてゐるよつて、外に比べて空氣が冷たいのは地下にこの部屋があるからだらう。

(「何にかの遺跡なのかな?」)

じつやう部屋は石で造りれているよつで、壁には不思議な絵が所狭しと描かれている。

(なんかピラミッドの中みたい……入つたことないけど)

なんとなく澄んでいるよつに感じじる空氣と遺跡内部の独特な雰囲氣を感じてみると、瑠璃はこの空間の不思議な点に気が付いた。

(なんで、明るこの? )

奇妙なことに地下にあるはずのこの建造物の中は、ほんのつとし  
た優しい明りに包まれていた。瑠璃がその光源を探してみると、どうやら壁自体が薄く光を発しているらしい。

原理にかなりの興味を惹かれたものの、今は他にするべきことがあるのであきらめた。

とりあえず狼の脅威からは逃れられたようの一安心していたが、どうせつて外に出るかが当面の問題になるようだ。落ちてきた穴にはとてもじゃないが届きそうになく、仮に届いたとしてもだ、まだ穴の近くにいた狼と鉢合わせるなんて危険は冒したくなかった。

その後しばらく頭を捻つてひねみたが妙案は出なかつた。

（残りの可能性は……）

瑠璃の視線の先には部屋を観察したときから気になっていた、奥に続いていると思われる通路があった。なにか危険があるかもしれないと選択肢からはずしていたが、他に手段がない今、ずっと

ここにいてもしかたがないので奥に続いていると思われる通路を進んでみることにした。

慎重に通路を歩いている間、壁には途切れる」となく独特な絵が描かれている。人の形をした絵があることから、おそらくは当時の生活環境や文化などが描かれているのだろう。

やうして約三十分、曲がることもなければ上り下りもない通路ひたすら真っ直ぐに進むと壁の光とはまた違う光が前方に見えた。

( なにがあるのかな? )

外の月明かりにしては明るい光に、今までよりも警戒を強めながらゆっくりと進み、辿り着いたのは日が眩むほどの輝きを放つ部屋だった。

最初に落ちてきた部屋の三倍ほどの広さを持つその部屋には天上有り届かんばかりに金貨が積み上げられていた。そればかりではなく部屋には数えきれないほどの財宝の数々が眠っていた。黄金の杯、銀の食器、宝石が散りばめられた王冠、見事な細工が施された装飾品、素人が見ても一つ一つにとてつもない価値があることはあきらかだった。

通路に零れている光は壁の明かりがこれらに反射していたものらしい。

どんな聖人でもこの財宝の数々を目にすれば、欲に溺れるただの人には成り下がるだろう。

実際に瑠璃も輝く黄金や、美しい宝石に心奪われていた。

そして欲望のままに財宝に手を伸ばそうとするが、瑠璃の手に異物が写り込んできた。

簡素な椅子の上に置かれた一冊の古ぼけた本。

普通ならそんな本は、この部屋に置かれている金銀財宝に田が奪われ気付かないであろう。だが、瑠璃はその本を田にしたときから周りの宝が震んで見えるような存在感を感じた。

一步また一步と瑠璃は無意識のうちに本に近づいて行った。

(…………あの本に、触れてみたい)

自分の欲求に従い、遂に本の前まで来ると、瑠璃は震える手を伸ばし本へと触れた。

『汝、力を欲する哀れなる者か?』

「な、なに!?」

突如頭の中に声が響いてきた。

『汝、我らが知識を欲する悲しき者か?』

瑠璃の反応に関係なく姿なき声は頭の中に響き続ける。

『我らが知識は太古の英知』

不思議な音色を持つその声は男よりも聞こえるし、女のようにも聞こえる。  
老人と言われればそうだとも言えるし、子供と言われればそんな気もしてくる。

『救いを『えれば、滅びも齎す』もたひ』

「ちよ、ちよっと待つて。あなたの言葉が分からぬのー。」

姿なき声に瑠璃は叫ぶ。

『汝、人の子よ。汝に受け継ぐ資格があるか視させてもらおう』

「一体あなたはっ…………くつ…………あ、ああ、あああああ  
…………！」

「誰なの？」と、いう瑠璃の問いは急に襲ってきた激痛によつて  
遮られた。体の中を搖き回されるような痛みが全身を這い、瑠璃の  
意識は強制的に遠のいていった。

瑠璃は朦朧もうろうとする意識の中で、姿なき声が何か言っているのを聞いたきがした。

少女はある日、一人の老人と出会う。

少女を見た老人は一冊の本を少女に渡した。

文字が読めなかつた少女は本よりも食べ物を欲しがつたが、老人は「いつかこの本が役に立つ日がきつとくる。だからそれまで大切に持つていなさい」と言つて去つてしまつた。

しかたなく少女はその本をボロボロの道具袋に入れると、再び食べ物を探して裏通りを彷徨う。さまよう。

渡されたのは一つの本、その価値に気が付くのはいつ遠くない未来知識。

## 第三話 遭遇（後書き）

今回は前に比べると少し短めでした。なんか伏線はあるのに回収していないようで申し訳ないのですが、広い心で待つて頂けたらと思います。

## 閑話 回想？（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」といつ方は是非ご覧ください。

「なんで自分のことを、ボクっていつの？」

それは幾度<sup>いくど</sup>となく聞かれことだ。だから、その質問に対する回答は決まっていた。

「男の子が多い環境で育つたからだと思つよ。気が付いたときには自分のことをボクって呼んでいたの」

ボクがそう言つと大抵の人は申し訳なさそうな顔をして、それ以上聞いてこようとはしない。

それはボクにとってありがたいことだった。

なぜならこの問いは、【瑠璃】という人間を形成している歯車の

中でも重要なモノの一つだからだね。」

生まれてからすぐに捨てられた瑠璃は物心がつく前から如月園にいた。

年上の子が年下の子の世話をする、それが如月園での暗黙の決まりだった。瑠璃も五歳になるころには自分より小さな子供の世話をすることになっていた。

最初の頃、如月園にいた女の子は瑠璃一人だけだった。周りはみんな自分より年上の男の子で、下の子の面倒をテキパキとこなす。おいていかれないように、下の子のお手本になるようにいつも必死だった。

もし、みんなの役に立たなかつたら……また、捨てられてしまうかもしれない

そんな恐怖が瑠璃から奪つた選択肢。

人に甘えること

人に頼ること

辛いことがあれば一人で苦しみ、悲しいことがあれば一人で泣いた。

「大丈夫、私は強いから」

そうやって自分に言い聞かせることで耐えていた。

園長は優しい人だつたが、とても忙しい人だつたので、自分の感情を表に出さなくなつていつた瑠璃に気付くことができなかつた。

ある日、如月園のみんなと公園で散歩をしていると、瑠璃は近くの草むらに段ボールに入つた子犬が捨てられているのを見つけた。

最初は園長に知らせようと思ったが、今の如月園では犬を飼うことはできないだろう。瑠璃は、飼うことができなくなつた動物がどうのような運命をたどるのか知つていた。しかし、園で飼うこともできない。

「わんー！」

どうしようかと悩んでいると、急に聞こえてきた鳴き声。瑠璃がそちらに顔を向けると、段ボールの縁に前足をのせてジーとひらを見ている子犬と皿があった。

その瞳はまっすぐに瑠璃を見つめていた。

この日から瑠璃は時間を見つけては子犬と一緒に遊び歩くようになった。

段ボールを今は使われていない近くの納屋に運び、捨てられていたクッショングやマットを納屋に持ち帰つて子犬が住める環境を整えた。餌はパンの耳を近所のパン屋さんから貰つことにした。

園のお手伝いもしなければならないのであまり長い間を一緒に過ごすことはできなかつたが、園では自分に心に蓋をしている瑠璃にとって拾つてきた子犬はかけがえのない友達だつた。

その日、瑠璃はずつと考えていた子犬の名前が決まつたことにつになく上機嫌だつた。さつそく名前を教えてあげようと納屋に向かうと、いつもは締まつているはずの納屋の扉が開いているのが見えた。

閉め忘れてしまったのか、それとも誰かに見つかってしまったのか。

瑠璃は慌てて納屋の中に飛び込んだ。

「おい、こいつ動かなくなつたぞ」

「えー、もう死んだの?」

「あははは、よわよわこの」

そこには床に倒れて動かなくなつた友達と、自分より少し背の高い三人の男の子がいた。

「あれ、もしかして君がこいつの飼い主？」

納屋に入ってきた瑠璃に気付いた一人が話しかけてきたが瑠璃の目は子犬に向いたままだった。

「あー、こいつならもう死んでるよつとー。」

瑠璃の視線に気づいた男の子はボールのように子犬を蹴った。床を跳ねるように転がってきた子犬は瑠璃の脚に当たつてようやく止まつた。

それを見て三人は大声で笑いだす。

瑠璃は足元に転がる友達をそつと持ち上げると、胸に抱いた。

（……君の名前ね…決まったよ。ふわふわと軽くて、真っ白で、  
冬に出会ったから【コキ】だよ。…ねえ、いい名前でしょ……コキ  
…………コキー！）

「とこりでさー、今日からこりは俺たちの秘密基地になつたから  
出て行つてくれない」

さんざん笑つて満足したのか一人が子犬を抱えて地面につづくま  
つている瑠璃を追い出そと肩に手をかけた。

「触らないで」

「えつ？」

瑠璃が腕を振り上げると男の子の腕から赤い飛沫しぶきがあがつた。瑠璃の手には赤く濡れた彫刻刀が握られている。

それは本当なら木のプレートに友達の名前を彫つてあげようと考え、持ってきたものだった。

「うわああああー！痛い、痛いよー」

「おまえなにしてんだよー？」

「！」「こんなことして警察に訴えてやるからなー。」

腕を切られた仲間を見て、若干顔を青くしながら叫んだ声は瑠璃の耳には届かない。

徐々に近づく瑠璃に部屋の隅に追いやられていぐ。

いくら相手が自分たちより小さな女の子とはいえ、刃物を持つている人間に立ち向かうだけの勇気は彼らにはなかつた。腕を切られた男の子は恐怖と痛みで気絶している。

「ま、待てよ。俺たちが悪かった。な、謝るからさ、だから

「

「つるわー

すでに顔の色が青を通り越して白くなつた男の子は懸命に言葉を紡いだが、最後まで言わないうちに瑠璃の腕は振り下ろされた。

その後の記憶は瑠璃ではない。

瑠璃の帰りが遅いのを心配して探しに来てくれた園長が、小さなお墓の前で眠る瑠璃を発見したのだ。

納屋の中で倒れていた三人は病院に運ばれたが怪我はたいしたものではなく、自分が切られたことによるショックが原因の気絶だった。

この件に関しては相手方の親御さんとも話し合った結果、このことはなかったことになった。

その日から私はボクになった。

男になりたかったわけではない。ただ、力が欲しいと思った。

自分の想いを貫き通せるだけの、守りたいものが守れるだけの力  
が欲しいと。

## 閑話 回想？（後書き）

閑話と云つておきながら、この話を読まないと伏線が回収できなかつたりするのはどういひてだらう？まあ、読まなくて本編の話はつながると思います。

誤字・脱字や意見がある方はお気軽にお声掛けください。

## 闇話 園長の願い？（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

私が孤児院を開いたのは、私が二十一歳のときだ。

当時そこそこ裕福な家庭に産まれた私の世界は、限られた枠の中にだけだった。そんな私の世界は、十八歳のときに父に言われた一言で大きく変わった。

「……もっと広い世界を見てこい」

「……え？」

そして私は気が付けば、最低限度のお金だけ渡されて紛争地帯に放り込まれてた。

常に聞こえる銃声と悲鳴。心が休まる時など一時たりともありはしなかつた。

父がなぜこのようなことをするのか解らず、こんな場所に置き去りにしたことに懼みを抱くようになった。

そんな地獄の中で私は、廃墟に暮らす自分より小さい子供たちに出会った。

彼らはボロボロになりながらも貪欲に生にしげみついていた。少年は手榴弾を片手に地雷原に突っ込み、少女は自らの身体を売つて糧を得る。

信じられない光景だった。

親もなく、金もなく、住む家もない。

私なら生きることよりも、死を望んでしまつだらう。そんな環境のなかでどうして生きたいと思えるのか。私には理解できなかつた。

ある日、道の真ん中にお腹から血を流して倒れている子供を見つけた。咄嗟に駆け寄り呼吸の確認をするとわずかにまだ息があつた。

(ここから病院まで歩く遠くなつたはず)

私は服が汚れるのもかまわずに子供を背負つて歩き出した。

しばらく歩くと視界に病院が見え、これで子供が助かると安堵した。そのとき背中から小さな声が聞こえた。

「愛されたかった」

小さな、だが深い想いが伝わってくる子供の最後の声だった。

私は泣いた。今まで一番泣いた。

悲しくて仕方がなかつた。

悔しくて仕方がなかつた。

（世界にはまだ愛されたくて必死に生きている子供がいるのに、なぜ救われないのか）

日本に帰った私は、大学に進学し卒業すると孤児院を開いた。

神様ではない自分には全てを救うことなんてできない。

だけど、せめてこの手の届く範囲にいる子供くらいは救える人になりたいと。

【如月園】

(どうかこじがよつやかへの子供たちに愛を広げる場所になるよつこ)

閑話 園長の願い？（後書き）

前回に引き続き閑話です。この次からは本編に戻ります。

誤字・脱字や意見がありましたらお気軽に声掛けください。

#### 第四話 弐器（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

## 第四話 武器

人間は古来より様々な武器を使って日々の生活を営んでいた。

人間は武器を使つことによつて厳しい自然の中を生き抜いて今日までやつてきた。

もし人間が武器を持つことをしなければ、とつぐの昔に人間は絶滅していたろう。

「へ、へへ……へーん……」

瑠璃は、瞼の裏側まで届く光に眩しさを感じ、目を擦って体を起こした。

「…………ふわあ…………」

瑠璃は朝が弱く、寝起きがかなり悪い。起きてからしばらく経つた今も、目は半分しか空いておらず、欠伸をすると足を崩して座つたままボーっとしていた。

「…………あれ？」

起きてから十分後。

ようやく頭が働きだした瑠璃は意識が無くなる前の記憶を思い出し、周りの変化に気が付いた。

遺跡の中で不思議な声を聴いて倒れたはずの瑠璃の体は、現在、荒野に生えている木の影にあつた。

（夢遊病……ではなかつたと思つたが……）

確かに自分の寝起きが悪いのは明田香と一緒に言われて知つていたが、夢遊病だと言われたことはなかつたはずだと、瑠璃は結論をだした。

（じやあ、どうやつてボクは外に出たんだろ？…）

太陽が昇り始めていることから少なくとも一晩は過ぎてこるようだ。

夜行性の動物も多くいる中で、意識がない間に襲われなかつたことに感謝した。とりあえず起き上るうとするが、自分がなにかを握つていることに気付いた。視線を手元に下ろすと瑠璃の右手にはナイフらしきものが握られていた。

鞘に収まっているナイフには装飾は施されておらず、鞘も柄も夜の闇を吸い込んだかのような深い闇色をしている。鞘からナイフを抜くと肉厚の刀身は深い紅色で血を連想させた。

(あの部屋にあった物かな? だったら、これって墓場泥棒とかにな  
っちゃうのかな……)

瑠璃は返してきた方が良い気もしたが、あそこからここまで来る間  
の記憶がないので返しに行きたくても行けないことに気付いた。ま  
た、昨日のように危険な動物に襲われることがこれからもあるかも  
しれないのに、護身用にナイフの一つも持っていたほうがいいかと  
考え直した。

(「めんなさい。」のナイフは預いてこきます)

だれに対しての謝罪なのかは分からないが、瑠璃はとりあえず謝  
るとナイフを上着のポケットにしました。

「さてと、まずは早く人を探さないと」

三つ目の狼に追いかけられてようやく自分が異世界に来たこと認

めた瑠璃は、これからのためにも早く人に会ってこの世界のことについて学ばなければならぬと感じていた。昨日見た遺跡からこの世界にも地球いた人間とそう変りのない存在がいるはずであった。

そうなると瑠璃が願うのは、

（最初に会つた人がどうか親切な人でありますよつこー）

荒野にこんな軽装でさまよつている十三歳の子供など至らしそぎるだろう。さうにこの世界のことをなにも知らず、言葉も通じないだらう。瑠璃はそんな怪しさ満点の子供にこの世界のことを教えてくれるような親切な人に出会いたかった。

（まあ、かなり厳しい条件だと思つけどね）

瑠璃はポケットの中にある感触を確かめると、そんな素敵な出会い願いながら再び荒野を歩き出した。

少女はいつもと同じように暮らす。

残飯をあさり、奴隸商人から逃げて、役人から殴られる。

不思議な老人から不思議な本を貰つても、その生活は変わらなかつた。

なにも変わらずに世界は回る、グルグル回る。

あと少し、新たな出会いはすぐそこにある。

## 第四話 武器（後書き）

まだ主人公は強くなりません。これからだんだんと強くなっています。いろんな意味で……。適当に気晴らし程度に呼んでいただければ光栄です。

誤字脱字がござりましたらお気軽にお声掛けください。

## 第五話 喪失（前書き）

「道化は強い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

## 第五話 憂失

人は失くしてから気付くことが多い。

それは親であつたり、友人であつたり、時間であつたりと様々だ。

そうして人は自分にとってなにが大切なのかを学んでいくのだろう。

考えが甘かったのだろう。

孤児院での暮らしへは決して裕福ではなかつたが、戦争もなく、飢餓に怯えることもなく、毎日布団の中で安心して眠ることができた。世界には常に命の危険にさらされている子供達が大勢いることも知つていたが、とても遠い世界のものだと感じていた。

自分がその立場に立たされて初めてわかる。日本という国がいかに平和で、自分がどれほど恵まれた環境にいたのかが。

瑠璃がこの世界に来てから、一ヶ月が経つた。

最初は村や町ぐらいすぐに見つけられるだろつと思つていた。しかし、所詮は優しい（甘い）世界で生きてきた人間の甘い考えだつた。

水は一、二日おきに飲むことができているが、こんな荒野に果物などの食べられるものがあるはずもなく、この世界に来てから瑠璃は水以外を口にしたことはなかった。

それに加えて、動物からの襲撃に怯えて草が風で揺れる音でも飛び起るような浅い睡眠を繰り返す生活をして、疲労は蓄積していくばかりだった。

太陽が真上に昇り、容赦ない陽射しがジリジリと照りつける。

瑠璃はふらふらと覚束ない足取り歩いていた。

「つ……」

瑠璃の耳に獣の唸り声が届いた。その瞬間、頭で考えるより先に体が動いていた。素早くうつ伏せになり茂みのなかに身を隠す。

巨大な食虫植物に食べられかけたり、子供の頭ほどの大ささを持つ蜘蛛の大群に追いかけられたり、朝起きるとたくさんの骨が転がる洞窟の中にいたりと様々な経験をしてきた。

二十日間を常にこのような危険のなかで過ごすことで身に付いた条件反射だった。

身を隠した後、状況を確かめるために恐る恐る茂みから顔を出すと、例の三つ目の狼が食事の最中だった。

この場面に出くわしたのは今日が初めてではなかった。十日ほど前にも一度だけ目にしたことがある。その時は狼に見つからぬよう早く離れようと、すぐにその場から立ち去った。

今回もすぐに立ち去ろうと思つていたが、なぜか瑠璃は狼たちの食事風景から目を離すことができなかつた。危険だとは分かっているが、瑠璃はその場を離れなかつた。

しばらくすると、狼たちは満足したのか瑠璃に気付くことなくその場から離れて行つた。

狼たちが去つていき、その場が静かになると吸い寄せられるように残飯に近づく人影があつた。

狼たちに食い散らかされたモノは見るも無残な姿だった。これは元がどんな動物だったのかを想像するのは困難だろう。からうじてわかるのは手が長く、毛に覆われている動物であったということだ。

風もなく辺りに腐臭が立ち込める中、瑠璃は食い入るようにその肉塊を見つめていた。そして、なにを考えるわけでもなく残飯に喰いついた。

心身ともに限界だつた瑠璃には考へてゐる余裕などなかつた。目の前に食べられるものがある、それがわかれば十分だつた。

生臭さと血の味に何度も吐き出しそうになるが、食べるのをやめることはなかつた。

肉は飢えを満たし、血は渴きを癒す

自分の中では音を立てて崩れるモノがあつた。

それが何かは分からぬ。だが、気が付いた時には瑠璃は泣いていた。

「うあ……あ……ぐす……うう……」

泣きながら食べ続けた。頬を伝う涙はとめどなく溢れる。瑠璃の顔は涙と血でぐしゃぐしゃに汚れていた。

(もう……戻れない)

なにを失くしたのかはわからないが、もつ元に戻ることができないのはわかつた。

たとえ一人に再会できても、何も知らず平穏の中でただ笑っていたあの頃にはもう戻れない。

飢えを満たした瑠璃は土で手に付いた血を落として、他の動物が血の匂いに引き寄せられて来る前にその場を後にしてた。

（戻れないのなら、進むだけ）

涙はすでに渴き、瑠璃の目には再び生きるための力が宿っていた。  
たとえどんなものを失おうとも、生きることを諦めるわけにはいかなかつた。瑠璃はまだ、三人で交わした約束を果たしてはいないのだから。

この日を境に瑠璃は他の動物の食べ残しや、ときには皿うナイフを使って小動物を仕留めて食べるようになった。

この絶望的な状況で瑠璃を支えていたのは、三人で交わしたたつた一つの小さな約束だけだった。

少女は奪つ。自らが生きるため他者から奪つ。

お金を奪い、食べ物を奪い、命を奪つ。

観客は想いを抱く。

それは罪だ。

人間として最低だ。

必ず報いを受けるだろつ。

さて、それは本当に罪なのか？

舞台は変わる、少女と共に変わってゆく

## 第五話 喪失（後書き）

こんな駄文を呼んで下せりてありがとうございます。感謝感激です。

誤字脱字がございましたらお気軽にご指摘ください。

## 闇話 回想？（前書き）

「道化は嗤い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」といつ方は是非ご覧ください。

明日香と一哉が如月園にやつてきたのは瑠璃が小学校三年生になつたころだった。

あの日以来、瑠璃の生活は淡白なものになつていった。

朝起きて朝食の手伝いをして学校へ行き、帰ってきて晩御飯の手伝いをしてお風呂に入り、眠る。

空いてくる時間は宿題をするか、ユキのお墓の前で本を読んでいた。

(つまらない)

どうしてみんな毎日笑つていられるのだろう？

なにが楽しいのだろ？

ボクは、なにがしたいのだろ？

「ねえ、そこでなにをしてくるの？」

学校が休日の日曜日。瑠璃はいつものようにお墓の前で本を読んでいた。そこはいつも静寂に包まれており、瑠璃の心が休まる数少ない場所であった。しかし、この日はその静寂を破るものがあった。

「うーーー」

突然かけられた声にびっくりして瑠璃は飛び跳ねるように立ち上がった。声のした方を振り向くとそこには一人の女の子が立っていた。肩まで伸びた髪には緩いパーーマがかかり、身長が自分よりも高いことからおそらく年上だろうと瑠璃は判断した。

瑠璃が相手を観察するように見ていると、女の子は柔らかく笑いながらしゃべりだした。

「はじめまして、私の名前は明日香。今日から如月園でお世話になるからよろしくね」

そう言つて明日香は瑠璃に向かつて手を伸ばした。久しぶりに話しかけられた瑠璃はしばらく呆然としていたが、差し出された手の意味に気付き慌ててその手を握り返した。

「は、はじめまして、瑠璃といいます。こちらがよろしくおねがいします」

それから二人は色々なことを話した。好きな食べ物や好きな色。自分の特技や趣味。たくさんのこと話をした。そして自分たちが同じ歳だと知り、一人の仲は益々縮まつていった。

(えりかだひつ?)

瑠璃にとつて明日香は不思議な人だった。あれほど人と関わることを煩わしく思っていた瑠璃の心にあつさりと入つてしまつた。明日香と過ごす時間は不思議と心地よいものだつたのだ。

夢中になつて一人が話しているといつの中にか由は傾き夕方になつていた。

あまり遅くなつて皆に心配をかけてしまつ。瑠璃と明日香は慌てて園に帰ろうと走り出した。しかしその歩みは思いもよらぬ原因で妨げられる」となる。

ガサガサガサガサ

バサツ

「ハハハハハハ

「わやあーーー！」

ドンッ ドサンーーー

園に向かって雑木林の中を一人で走っていると横から何かが飛び出してきた。瑠璃より少し前を走っていた明日香は運悪く飛び出してきたものとぶつかり派手に地面に倒れこんでしまった。

「だ、大丈夫？明日香ちゃん」

「いたたた、なんとか…ね」

瑠璃の心配する声に苦笑しながら答えた明日香は自分の隣に転がつているモノを見た。つられて瑠璃もそれを見ると、どうやら人らしい。体中に葉っぱやら枝やらを付けているためよくは見えないが。

「さ、瑠璃。こんな得体の知れないものは放つておいて早く帰りましょ」

「え、えー」

「さつが早いか明日香は瑠璃の手をひとつ歩き出した。

「さつひと待てよ……それが迎えに来てやつた幼馴染」との態度  
かー？」

「なによ、あんたの」だからさりげなく迎えに来たものの道に迷つ  
て困つてたんだしょ」「

葉っぱや枝を体からぬつた男の子がさりげなく明日香の知つ合ひ  
し。

「あのー、畠田香ひやさんの知つ合ひなの？」

瑠璃は言い争いを始めた一人に恐る恐る声をかけた。

「幼馴染だ」

「腐れ縁よ」

微妙にお互いのニュアンスが違う。しかし知り合いであることに変わりはないようだ。

その後も言い争いをやめなかつた一人をなんとか止めて園に帰つたときには、すっかり夜になつており、三人揃つてお説教を受けることになつてしまつた。

明日香と明日香の幼馴染（？）の一哉は、自分たちがいた孤児院が経営の悪化でなくなることになり、如月園に来たらしい。

瑠璃にとって二人と過ごす時間はとても楽しいものだった。あれほどつまらなかつた世界も三人で一緒にいるだけでとても輝いて見えた。色あせた世界が色づいていくのを感じた。

それでも瑠璃はまだ壁を作っていたのだろう。二人が大切だからこそ、失うようなことになつても自分が傷つかないようにと。

そこで瑠璃は強盗事件に巻き込まれた。

園に帰るため三人並んで桜並木を歩いていた時、瑠璃は消しゴムが切れていたことを思い出した。二人には先に帰るように伝えると瑠璃は近くのコンビニへと向かった。

無事に始業式が終わり、瑠璃たちは晴れて五年生になった。

幸いにも連絡を受けた警察がすぐにやってきて大きな事件にはならずに済んだ。瑠璃も怪我をする」ともなく警察の質問に答えるとすぐに返してもらえた。

その際、小学生であつながら泣く」ともまれない」ともなべ警察官の質問にただ淡々と答えていた。

園に帰ると事件の話を聴いていた園長と、園長から事情を聴いた明日香と一哉に出迎えられた。今にも泣き出しそうな顔をして抱きついてくる明日香と、その後ろで安心したように笑っている園長と一哉の姿がある。

(みんなを心配させてしまった)

申し訳ない気持ちになつた瑠璃は、自分が平氣であることを云ふたかった。

「大丈夫だよ、ボクは強いから」

その時の明日香の顔はずつと忘れることができないだろう。たくさん感情が織り混ぜになつて、怒っているよりも悲しんでいるよつとも見えるその泣き顔を。

瑠璃には、どうして明日香がそんなにも辛うつな表情をするのか解らなかつた。

「なんで……なんでそんなに辛そうな顔で笑うのー? 瑠璃はいつもそうだよ。一人で抱え込んで私たちにはなにも言わない。私たちはそんなに頼りない? 私たちは家族じゃないの? ……もひ、そんなふうに笑わないでよ」

明日香は声を荒げて瑠璃に捲し立て、最後には頬み込むようになつぶやくと、今までよりも強く瑠璃を抱きしめた。

「違う……ボ、ボクは……そん……な……」

瑠璃は必死になつて否定の言葉を紡ごうとしたが無理だった。頬を伝う暖かいものを止めるることはできなかつた。決して悲しかつたわけではない。むしろ嬉しかつたのだ。だれにも気付かれないとつていた。だけど、気づいてくれた人がいた。ボクを見てくれていた人がいた。それが瑠璃には嬉しくて仕方なかつた。

その日の夜、瑠璃たち三人はある約束をした。

悲しいときは、苦しいときは一緒に泣こう

嬉しいときは、樂しいときは一緒に笑おう

幸せになる時は、三人で一緒になろう

小さな子供が交わした小さな約束。

ボクを繋ぎ止める唯一の鎖。

閑話 回想？（後書き）

誤字脱字が一大堆したらお気軽にお声掛けください。

## 第六話 接触（前書き）

「道化は強い、世界は踊る」では戦闘などにおいて生々しい表現を用いる場合があります。また、人が死ぬシーンもあります。それでも「大丈夫だよ」という方は是非ご覧ください。

## 第六話 接触

人間とは順応性の高い生き物である。

たくさんのお金があれば贅沢な暮らしに慣れてしまうし、一人ぼっちなら孤独であることに慣れてしまう。

それは人間の美德であり、惡徳でもある。

精神を研ぎ澄ませる。チャンスは一回、失敗は許されない。

体勢を低くして身を隠し、息を殺しながらタイミングをはかる。  
普段は気にしない風の音すら敏感に感じる。

風が止んだ。

瑠璃はその瞬間を逃さず、持っていたナイフを獲物に投擲した。

「の世界にも四季というものがあると瑠璃は考えていた。感覚的なものだが、季節の移り変わりも日本と変わらないだらう。

「おらに来てしばらくは何日たつたか数えていたが、二か月を過ぎたあたりでやめてしまった。日が経てば経ほど瑠璃の中には焦りが生じるのだ。いつまで経つても人には会えず、明日香たちを探すどころの話ではない。日々、自分が生きていくだけで精一杯だった。

僕は食べられる植物や小動物を探しながら歩き、夜になると安全な木の上で眠る。この一年ですっかり定着してしまった習慣だ。

狩猟技術の向上はもちろん、動物を解体する腕も上がった。今も狩つたばかりの兎を捌いている。最初の頃はよく指を切つていたが、ナイフの扱いにもすっかり慣れた。

遺跡から持つてきてしまったこのナイフだが、不思議なことに刃

が傷むことがないのだ。どういった原理かは分からぬがとても重宝している。瑠璃の生活には欠かせないものとなっていた。

兎を捌き終え、瑠璃はナイフをしまった。さっそく食事にしようと兎の肉を手に持つたときだった。

「――」

静かだった荒野に人の悲鳴が響いた。

「え、人の声！？」

瑠璃は匂いの強い草を手に擦りつけて血の臭いを消すと急いで立ち上がった。悲鳴が聞こえた方へ向かおうとして、足が止まった。悲鳴が聞こえた方向と兎の肉を交互に見る。

（どうしよう。せつかくのお肉なのに。でも持っていくわけにもいかないし。でももつたいないし）

人がいるかもしないので見に行きたいが、瑠璃は肉を残していくのが心残りだった。しかし、もう一度悲鳴が聞こえて瑠璃は泣く泣く兎の肉を残して走り出した。

（やよつなら、ボクのじはん）

現場に到着すると人が黒いチーターのような動物に囲まれていた。どことなく昔の自分を思い出すような光景だ。

(どうしようつか?)

いくらナイフの扱いが上達したといつても限度がある。一対一ならまだしも、群れを相手にするのはまだ無理だろう。

(この状況では見捨てるのが一番賢い選択だよね)

しかし、初めて見つけた人間だ。色々と聞きたいこともある。

(仕方ないかな。あまり使いたくはないけど)

瑠璃は制服のポケットから葉で作られた包みを取り出すると、風上に回るため体制を低くしたまま走り出した。

なんとか生き延びる手段を探そうとするが、絶望的な状況である

(……どう…すれば)

いくら少女が獣人とはいっても体力に限界はある。徐々に走る速度が落ちてきて、とうとう周りを囲まれてしまった。

薬草は採取できた。しかし、ようやくヒカントに皿を付けられてしまった。

薬草を採りに来ただけのはずだった。普段は近くの森で採つていが、今日はこの荒野でしか採れない薬草を手に入れる必要があった。

」とは少女にもわかつていた。

（でも、ただでは殺されないからね！！）

どうせ死ぬなら少しでも足搔いてから死のうと、少女は戦う覚悟決めた。手足に力を込めて臨戦態勢に入る。しかしそこで思いもよらぬことが起こった。先程まで牙をむき出しにして少女を威嚇していたリカントたちが次々と倒れていくのだ。

なにが起こったのかわからずには然としていると、少女の体も徐々に痺れていくのを感じた。手や足が動かなくなり、その場に崩れると意識までも遠のいていった。

「あー、やつぱり人にも効いちゃうんだ」

瑠璃は茂みから立ち上ると苦笑しながら言つた。

瑠璃は風上に回りこんだあと、持っていた葉の包みを解き、中にある粉末を風の流れに乗せて散布したのだ。

前に、動物がある植物を食べて動けなくなっているのを見かけたことがあった。この粉末は、体を痺れさせる毒性を持つその植物の根を乾燥させて粉状にしたものだ。しかしこの植物はなかなか手に入りにくく、いざという時のためになるべく使わないようにしていたのだ。それに動物では何度か実験をしたが、自分に試すにはかなりリスクが大きかったのでやめておいたのだが。

(試さなくてよかつた)

瑠璃は冷や汗を拭いながら自分の判断が間違つてなかつたことに安堵した。もし自分が使つていたら、たいした抵抗もできずになにかの餌になつていたかもしねり。

ザクツ　ザシュツ　ザクツ　ザクツ　ブシュツ

瑠璃は動けないチーターもどきの喉を切つて止めを刺しながら倒れている人に近づいていった。

全部のチーターに止めを刺し終えてから襲われていた人間の安否を確認をした。わずかに胸が上下に動いていることからどうやら生

きていたらしい。瑠璃より少し身長の高い女の子だった。髪はピンク色で動きやすい軽装をしている。そして、頭から一つの獣の耳が出ており、ズボンの後ろには尻尾まである。

「…………人間？」

なんともいえない顔をした瑠璃の疑問は誰に聞かれることもなく乾いた空に霧散した。

少女は路地裏で倒れている女の子を見つけた。

ここに人が倒れていることは珍しいことではない。様々な理由によりここには少ないとは言えないほど死体が転がっている。故に普段ならいつものことだと気にしないが、なぜか今日はその女の子のことが気になった。

結局、少女は女の子を引きずりながらして自分の住みかへと運んだ。

この出会いには少女になにをもたらすか。

女の子は少女にとって幸せを運ぶ天使となるのか、それとも不幸を招<sup>まね</sup>悪魔となるのか。

新たな役者は舞台に立つた。物語は急速な動きを見せていく

## 第六話 接触（後書き）

誤字脱字がございましたらお気軽にお声掛けください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5997x/>

---

道化は嗤い、世界は踊る

2011年11月17日18時49分発行